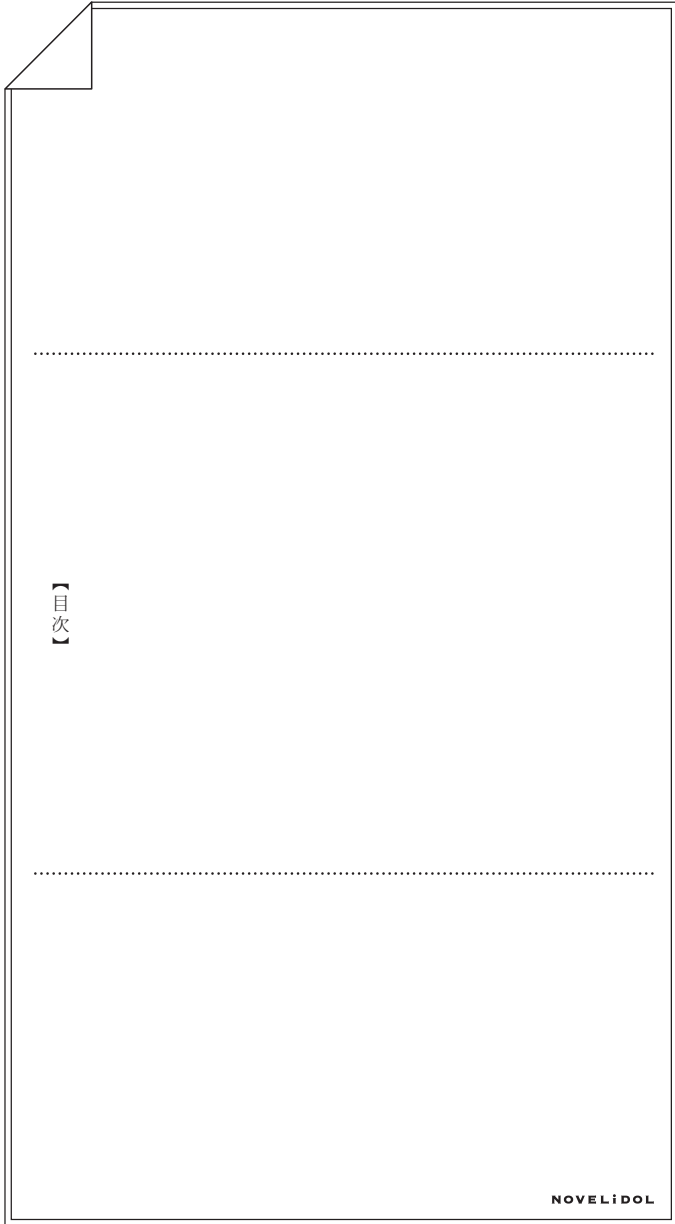


【序文】

二百年前の古典小説が、今なお恋愛の甘酸っぱさとその苦みを正しく伝えていることを考えてみるに、僕がこうして大人になった今、かつての恋愛の記録を一つ残してみようとするには、一定の価値があるように思う。何故ならば、人間に本当に必要で大切な感情は、時代によらず不変不動なものであるからだ。これから綴る恋愛の記録が、本書を読んだ人に何らかの助けにならんことを欲して。

なお、本書の執筆にあたってはシャルロット・コーボレーシヨンのライティングノート「ゲーテの文法 ver.4.0」に手伝ってもらったことを併記しておく。あの時代の僕の思考や雑記、その他の必要な情報の収集・編集に大いに力を貸してもらった。その結果、伝えたいことを最も適切な形で出力することが出来たように思う。

二〇七一年六月・湘南某所にて



【目次】

- 【B】begin/始まり…008
- 【C】contact/接触…011
- 【D】data bank/辞書…019
- 【E】e-mail/手紙…019
- 【F】frontier/火星…020
- 【G】go-ahead/覚悟…023
- 【H】help/後見人…024
- 【I】intelligence/超高度情報
ローマ数字の一…029
- 【II】…034
- 【J】joy/戯れ…037
- 【III】…041
- 【K】knowledge-base/閲覧履歴…044
- 【L】letter/手紙…058
- 【M】Monday/月曜日…060
- 【N】news/記事…070
- 【IV】…072
- 【O】ordinary/平穩…078
- 【P】picnic/探索…085
- 【Q】question/検索…098
- 【V】…099
- 【VI】…101
- 【R】riot/反抗…106
- 【VII】…123

- 【S】 sign/兆し…128
- 【Ⅷ】 …131
- 【T】 true/真相…132
- 【U】 upside-down/急展…139
- 【V】 vision/将来設計…144
- 【W】 want/望むもの…145
- 【Ⅸ】 …150
- 【X】 x/交差点
- ローマ数字の十…152
- 【A】 airmail/手紙…159
- 【Y】 Y/三叉路…162
- 【Z】 zero-talk/茶番劇…169
- 【・】 period/結末…177

(あるいは)
SFのある風景

【B】begin/始まり

高校三年生になった五月。すでに夏の気配はそこら中に満ち満ちて、蟬の鳴き声が遠くに聞こえるような気がする季節。尋常じゃない日差しの中、僕は、見知らぬ同級生の自宅に向かって、急な坂道をうんざりしながら登っていた。

「彼女の自宅にこれまでの配布資料を届けてもらえないかな？」

先生にそう頼まれたのは、今日の放課後のことだ。

「なんで僕が行かなきゃならないんですか？」

「放課後、特に予定なんか無いんだろ？」

恰幅のいい髭面の体育教師は、下品な笑顔で僕に言った。確かに、僕に放課後の予定は無い。だからと言ってこんなお遣いをさせられる理由も無い。僕は反論する。

「いや、でも今時配布物なんか、データで送ればいいじゃないですか？　なんでわざわざ僕が行かなきゃならないんです？」

「うーん、送っても返信が無いんだよね。心配じゃない？　高校に入ってからずうっと来てないのよ、彼女」

「それは、知ってますけど……」

この春のクラス替えの時、彼女の噂を耳にした。在籍しながらも、全く登校してこない女子学生の存在。

「だったら、先生が行けばいいじゃないですか？」

「俺は部活の顧問で忙しいからなあ……。頼まれてもらえない？ 彼女に会えたらついでにさ、学校に来るよう促してみてよ。お前、こういうの、向いてると思うんだけどなあ」

「……分かりました」

ありがとう、そう言って先生は、嬉しそうに配布資料が一式入った封筒を僕に手渡した。

その女子学生の家は、新藤沢から北に四駅移動した湘南ヶ丘の市営アパートの一室にあった。駅からそのアパートまでは歩いて三十分くらいの距離である。

「信じられない。この急な坂道をこなくそ暑い中、歩いて行かなきゃならないのか」
一応、検索はかけてみた。市営アパートに向かうためのバスがあっという間はすぐだと考えたからだ。けれども僕の情報端末は答えを示さずに、検索エラーだけを伝えてきた。

コンクリートの舗装路が厳しい熱射を僕に突き刺す。こちら辺りになると、市の中心街で散布される冷却剤の効果はほとんど無い。日射病になっても困るので、僕は日傘を取り出した。黒い花卉の傘が開いた。

「そろそろのはずなんだけど……」

ぜえぜえと息を切らして僕は、最後の一步を登り切る。そして、目の前に巨大な市営アパート群が広がっていた。世帯数約三千五百、住民数約八千。それらを収容する装飾の無い殺風景な白い建築群。後ろを振り返れば遠くに海が見渡せ、その水平線からは真っ青な空に突き出すように黒い塔が、天へと向かって延びていた。江の島沖から六十キロ先にある宇宙エレベーターの機動港だった。ここから見えることは、ごく稀なことだ。しかし、そんな偶然に喜ぶほどの余裕は、今の僕には無い。

いくつもの棟を抜け、目的の部屋に辿り着く。K・十三棟の二三階、エレベーターから数えて三つ目の部屋。そこが彼女の家であった。随分古い建物だった。所々の壁の塗装は剥げていて、ひび割れが入っている。そして、ここまで来てようやく僕は、この行為の無意味さを理解した。一リットルの汗をかき、不快指数が最大になった結果、僕は悟ったのだ——この配布物を手渡して一体何になるというのか。彼女の話は何も知らないし、彼女に学校に来るよう、促す？ そんなことを何で僕がしなくてはならないのだ。したところで、彼女が学校に来るようになるとは思えない（二年間まるまる来てないんだぞ?）。加えて実際の所、何と声をかければいいのか分からない。

そういう自暴自棄な気持ちを持って、僕は彼女の家のインターホンを押した。勢いよく、そして適当に。

彼女の名前は、サラガネ・サラサという。

【C】contact/接触

インターホンが鳴り響いた。けれども部屋の中からは何も気配が感じられない。時刻は午後三時過ぎだ。彼女の両親は出掛けている、彼女自身も部屋にはいないのかもしれない。ここまで来て留守なのも困ったが、いないならいいで好都合でもあった。書類一式はポストに突っ込んでいけばいい。行ったけれどもいなかった、そう言えばあの先生の頼み事にも一応応えたことになる。

二回三回と立て続けにインターホンを押した。どうせいやしいのだから、そうタカをくくっていた。そして中からパタパタと足音がして、ドアが乱暴に開かれる。

彼女は、部屋にいたのだ。

「はい、どちら様？」

突然の対面に僕は面食らった。何故、急にドアを開けたんだ。もうワンアクションあつたていいじゃないか。訪問者がまだ誰だか分からないうちに、彼女はドアを開けた。無防備にも程がある！

「ああ、えっと……」僕はどもりながら、自己紹介をする。名前を、そして同じ高校のクラスメイトであることを、伝える。

「ああ、はい。で、何の用？」

彼女が、僕の頭のとっぺんから靴のつま先までをざっと見る。そして、制服姿であることを確認すると、一応、同じ高校の生徒であることを理解したようだった。

「ああ、いや、ちょっと先生に頼まれて、配布物を……」

僕は肩にかけた鞆をおろし、中から封筒を取り出した。

「ありがとう」

そう言う彼女に書類を手渡した時、僕は改めて、彼女をよく見ることが出来た。

アルビノ——彼女に対して最初に抱いた印象はそれだった。粉雪の様な白く透き通った肌。だが彼女の持つ艶やかな黒い髪が、アルビノで無いことを物語っていた。内向きにカールした真っ黒なセミロングヘア。そして彼女の瞳も恐ろしく澄んだ黒色をしていた。黒いビードロ、そんなものがあれば、それが最も適当な表現な気がする。何もかもが作り物めいた美しさ、それを彼女は持っていた。

「何か？」

封筒の中身を確認していた彼女が、顔をあげて僕に問いかける。彼女に見とれていた僕は慌てて顔を逸らす。

「いや、何でもないで、す……ってか、そんな書類、もらっても意味ないよね。だって、健康診断の連絡とか一年の予定表とか、そんなのどうってことないでしょ？ 調

べればすぐに分かる情報なんだし……あ、あと、これ、先生から連絡あったでしょ？
見てない？」

彼女は僕をじっと見て、抑揚の無い声でハッキリと答える。

「見てない」

「そう、見てないか。そうかー……」

「うん、見てない」

さて、会話が止まってしまった。何を話したらいいのか、てんで分からない。どうしたものだろう。このまま帰ればいいのだろうか。先生からの依頼も一応果たしたことだ……だが、待てよ、今来たクソ暑い道のりをまた歩かなければいけないのか？ いや、それは勘弁してほしい……。

そんなことを思いつつも他に選択肢が無いことを悟り、別れのあいさつをしようとした間際――

「あがってく？」

彼女がそう言った。

「え、いいの？」思わず嬉しそうな声を上げてしまう。

「暑そうだから、何か飲んだ方がいいかなと思って……」

「ご両親とかは、大丈夫なの？」

「大丈夫。親、いないから」

「そう、それなら、申し訳ないんだけど、少しあがらせていただきます」そう言って、僕は靴を脱いで玄関に上がった。そしてその時の僕は、愚かにも、彼女の言った両親不在の意味を正しく理解出来ていなかった。

グレーのTシャツにデニムのホットパンツ姿の彼女に従って、中に入ると、嗅ぎ慣れない匂いがしてきた。インクの匂いである。六畳程のリビングに入るとそこから中に雑誌や新聞紙が散乱していた。データではない、現物としての、印刷された状態での、雑誌や新聞紙。

「図書館みたいだね」

「そこらへんに適当に座って」

彼女は僕の話の流れを流して命じた。座れと言われても、それらしい椅子もない。部屋にあるものはベッドとサイドテーブル、それと散らかった印刷物だけだった。仕方がないので僕は床に座った。

「お茶でいい？」

「はい、何でもいいです」

床に散らばった印刷物をチラと見る。二〇五一年の経済雑誌だった。十年前のものだ。驚いた僕は他のものにも手を伸ばしてみる。五年前の新聞、八年前のファッショ

ン雑誌、最新のものに交じって恐ろしく古い印刷物がいくつもあった。

飲み物を持ってきた彼女に、僕は問いかける。

「何、これ？ 何でこんな古い雑誌、読んでるの？ ってか、何で、印刷されたもので読んでるの？」

「何か、変なの？」

そう言って、彼女はベッドに腰掛けた。軋きんだベッドから投げ出された彼女の白い素足。目のやり場に困り、僕はまごついてしまう。

「へ、変でしょ？ だってこんなもの全部検索すれば出てくるじゃん」

「……でも、マサキさんが読めって」微かに首を傾げる彼女。

「マサキさん？」

「そう、マサキさん」

そう言って彼女はコップに口をつけ、そのまま黙りこんでしまう。そうですか、マサキさんが何なのか詳しく説明する気は無いわけですか。仕方なく僕が会話を引き継いで、尋ねる。

「先生からのメールは何で見なかったの？ 心配してたよ」

「情報端末、持っていないの。アドレスも、無い」

「そんなバカな」

僕は乾いた笑い声をあげた。が、それも短く虚空に消えた。彼女が続けて言う。

「本当に、持っていないの」

「……本当に？ 真面目に言ってるの？」

僕は彼女の顔を覗き込んだ。表情は固定されたまま。嘘を吐いているようには見えない。

「信じられない……じゃあ、何？ 先生は誰宛にメールを送ったの？」

「多分、マサキさんのアドレス」

「ああ、そう」

またマサキさんか。これはとても変わった女の子だ。これじゃあ、学校なんかにも来やしない、そんなことが頷ける変人っぷりだ。

「それで、何で学校に来ないの？ あ、いや、別に話したくないなら別にいいんだ、ちょっと気になっただけだから」

彼女はコップをサイドテーブルに置いて、僕をじっと見つめる。

「まだ調整が付いてないから」

「調整？ 何の調整なの？」

「分からない」

僕はかぶりを振って溜息を吐いた。彼女は何かの病気なのではないだろうか、そん

な疑念が頭をよぎった。学校に来る気なんか全くないのだろう、きっと。

「まあ、いいや。来なくなったら来たらいと思うよ」

「そう。あなたはそれを言いに来たの？」

「……いや、先生に頼まれただけだよ」

そう言って僕は、今した発言があまり彼女に好意的でないような気がして、取り繕うように言葉を継いだ。

「先生ってのもさ、サッカー部の顧問なんだけど、ちょっとね……その先生に頼まれたら断りにくいんだよね。僕……サッカー部だったから。でも、怪我をして辞めた。

去年の話。だから、何か悪くて……」

「そう」

あまりに興味がなさそうに返事をされて、僕は少し気分を害した。彼女にこんな話をして何になる。

「アキレス腱をやっちゃったんだ。でも、今時それくらいすぐ治るわけじゃん。でも、駄目だった、昔みたいにプレー出来なくて、辞めた」

僕は手に持ったお茶を飲み干して、立ち上がる。もうお暇いそぎしようと思う。

「じゃあ、そろそろ帰るよ。お茶、ありがとうね」

“美容師の指先問題”という命題がある。二〇二七年にミネソタ大学・生体工学部教

授のドナルド・ゲッターが唱えた命題で「肉体における欠損部位の遺伝子学的補完行為は、その欠損を以前のように元通りにすることは出来ない」というものである。これは、事故で指を失った美容師が遺伝子工学で全く元通りに治療した指を使っても、以前のように髪を切ることが出来なかったという研究から来ている。同様のレポートは世界中から上がっており、結果、肉体の欠損の完全な復元には、過去に肉体が記憶しただけの時間が必要になることが分かったのである。

玄関で靴を履いて、見送りに来た彼女に一応訊いてみた。

「ここから駅までのバスとかって無いの？」

「知らない」

予想していた通りの答えだ。

「無いのね、やっぱり。まあ、カミサマに訊いてもそう答えたから、そうなんだとは思っていたけれども」

「カミサマ？」

「そ、カミサマ。知らないなら知らないでいいよ。それじゃあね」

そう言って、僕は彼女の家を出た。陽はだいぶ傾き、生ぬるい風が僕の頬をそっとなでる。彼女はカミサマを知らないのか。今時カミサマに訊けば、何でも答えてくれるというのに。

古臭い白けたアパート群を抜ける時、行きには気付かなかった喫茶店が目についた。木造のこぢんまりとして静謐せいひつな感じをたたえた喫茶店だった。まだ暑い日差しの中、一人の男性客が外のラウンジでコーヒーを飲んでいる。

そして、僕は彼女の家に日傘を置き忘れたことを思い出した。取りに戻る気力は無い。僕は仕方なく家路についた。

【D】 data bank/ 辞書

カミサマ【かみさま】

二〇二〇年代初頭、ネットワーク上に突如出現した自律思考プログラムの総称。匿名のプログラマー数名が開発したと考えられているが、その発祥には諸説ある。この数十年の間に思考パターンの自発的な拡張・再構成を行い、国際ロボット委員会設定のAレベル・VIに規定された唯一のフリープログラム。ネットワーク上にある情報をもとに、利用者の質問に答えることが出来る。

引用 新世紀大宇海第二十三版

【E】 e-mail/ 手紙

家に帰ると、姉さんからのビデオメッセージが届いていることを、母が事務的に僕

に告げた。僕は二階の自室に入り、壁面のパネルをタッチする。

壁が薄く発光をした後、OSが静かに起動する。メールソフトを身振り呼び出し、姉さんからのビデオメッセージを再生した。姉さんは今、火星で働いている。

狭いコンパートメントの中、クリム色の壁を背景に、僕の姉さんが話し始める。

「あー、久しぶり。多分一カ月ぶりのメールです。こないだの返信、見ました。クラス替えね。ちょうど良いじゃない、そこで友達作って楽しくやってくれば良いと思う……」

姉さんはセミロングの茶髪を後ろで一つ結びにしていた。次に話す言葉に詰まっているようで、姉さんは目線を下に向ける。カメラに向かつての独白は、何を話せばいいのか分からなくさせる。

【F】 Frontier / 火星

姉さんが火星に行くとは決断したのは、今から二年前だった。僕が高校に入ったばかりの頃で、あの火星居住地の悲惨なパンデミックが発生して数カ月後のことだった。

もちろん、父も母も、そして僕も反対をした。ただでさえ気の遠くなるような時間をかけて火星に行く。それも、パンデミックが起きた後の災厄の地へ、まだ大学院在学中の女学生がたった一人で。反対しない家族がいるわけではない。

「私の恋人が、あそこで働いていたの」

姉さんはそう言った。それまで姉さんに恋人がいたことを、母も父も僕も誰一人知らなかった。

「大学の先輩で環境学専攻。テラフォーミングの研究で向こうに行っていたの。でも、あのパンデミックがあつてから、連絡が取れない。多分、もう生きていないと思う。あの人が火星でやりたかったことを私が代わりにやろうと思うの」

火星居住地でのパンデミックは、惑星進出黎明期の人類に大きなショックを与えた。もちろん、理屈の上では人類がこれまで罹^{かか}ったことのない感染症がいずれ発現すること、誰もが知っていた。だけれども、いざ実際に発症してみると全ての対策が後手に回った。感染はついぞ止められず、一部居住地を隔離・閉鎖することで一応の終息を見た。国籍も年齢も問わず多くの死者が出た。だがそれは、人類の大半にとっては遠い世界の出来事で、人々はまるで映画の一部を観るようにニュースを見ることしか出来なかったのである。

だから、僕とあの災厄を繋ぐものは、火星へのわずかばかりの募金くらいのものだと思っていた。姉さんがあんなことを言い出すまでは。

姉さんが火星に向かう前に一度訊いたことがある。

「何でそこまでして火星に行くの？ 姉さんだって、一歩間違えればどうなるか分か

っているんでしょ？」

こちらを見ずにしばらく押し黙ってから、姉さんはこう言った。

「私もね、こんな目に遭って初めて分かったんだけど、何事も無関係なことなんか無いんだよね。恋人が火星にいなければ、多分今回のパンデミックだって他人事だと思っただけと思う」

「それだけが理由なら、わざわざ火星復興なんかに行かなくて……仕事にする必要なんかあるの……？」

姉さんはこちらを見て言った。

「そうじゃないんだな。供養したいとか無念を晴らしたいとか、そういう気持ちではないのよ。私の知っている狭い世界と、ずっとずっと遠くの火星が繋がっていることを知って、私はとても個人的に覚悟させられたのよ。だから、行くの。火星に行って、私のために何かするべきだと、覚悟させられたから……この世界に、覚悟させられたのよ」

そしてまた姉さんはそっぽを向く。

僕はこの時の姉さんの横顔を見て、その発言の真意を上手く汲み取ることが出来なかった。でも多分それはおおよそ次の様なことなのだろうと思う。「覚悟」には、それをするためだけの悲惨で苦い経験が必要なのである。

「うーん、話すこともそれほど無いんだよなあ」

そう言って姉さんは席を立ち、カメラを手に取った。映像が縦横に揺れ、コンパクトメントの窓から、外の様子が映り込む。火星の赤い空に赤い大地。そして、一つの白い建物が目に付いた。ビニールハウスの様な構造の建物だった。

「あれが、今やっている酸素生成の実験棟。苔の育成をして、光合成をさせているの。でも、酸素の生成量は正直全く足りてない。結局今の居住区の空気を賄っているのは、極冠から輸送した水を分解したものになっちゃってるしね。アレ、生成したばかりのは、独特の匂いがして、私はあまり好きじゃないんだけどさ。でも、無いものはしょうがないからね。まあ、そんなことはいいんだった。あれよ、あの話をしようと思うてたんだ。あんた、〃来年で〃高校卒業でしょ？ 卒業したらどうするつもりなの？ もし大学に行くようなら、あたしが通ってた研究室の教授に推薦状、出しておくとど？」

カメラが自分に向けられなくなって、姉さんは饒舌に話し始めた。

「まあ、もしも働くっていうのなら……そうね、その時は何もしてあげられないけれど。でも、何もしないってのは、やめなさいよね。母さん、また心配するから。ただ

【G】 go-ahead/覚悟

でさえ、私がこっちに來てからずうっと怒ってるでしょ？ だからさ、あんただけでも良い子でいてほしいわけよ。まあ、良い子が何なのかっていうのはまた別の問題にはなるんだけどもさ、それはまた別の機会に話しましょう。それじゃあ、返信、よろしくね。母さんと父さんにもメール送ったけど、あんたからもよろしく言っておいてください。二人とも未だに私を許してくれてないみたいだから。ホント、残念なことよね。それじゃあ、またね」

姉さんが画面に顔を出し、こちらに手を振った。そしてその後ろでは、赤い砂が強風に煽られて舞っている。死んだ惑星の赤い血脈。

僕は、適当に返事を書いて送った。面倒だったので、文書ドキュメントのメールで済ませた。内容もおざなりのもの。進学か就職かはまだ決められない。これでも僕は、今を生きるのに精一杯で、これから先のことを考えるだけの力は残っていない。多分、姉さんは幾らか機嫌が悪くなって、少し怒ったメールを送ってくるに違いない。でも怒られるのは、どんなに早くても三日後にはなるだろう。

言い訳をさせてもらえれば、僕はこの時何かを決断するための、覚悟の準備がまだ出来ていなかったのである。